熊野三山信仰と「熊野観心十界曼荼羅」

Kumano Sanzan Shinko (Faith and Three Grand Shrines of Kumano)&Kumano Kanshin Jikkai Mandala (Kumano, Meditation and Ten Worlds of the Mandala)

縄 手 教 真*
Kyousin NAWATE

Abstract

The unique and diverse fields that encompass the study of Kumano include the natural environment, folklore, history, culture, and places of worship.

The shared resources that are indispensable to human beings provide a research foundation for the relationship between the natural environment and culture; the relationship being one that is fostered by worship carried out in deep mountains and valleys, where local people believe gods reside.

Ever since Kumano was registered as a UNESCO World Heritage site in July, 2004 under the "Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range", as many as 150 thousand tourists and fans of Kumano Kodō have been visiting this place annually. As a result, aspects of the ancient history of the Kumano area have come to attract nationwide attention and reevaluation.

This report discusses the historical significance of the *Sanzan Shinko* focusing upon more than ten sources of the *Kumano Kanshin Jikkai Mandala* which have been discovered in Mie prefecture.

キーワード:熊野権現，信仰と曼荼羅，密教思想の一元性
三重の「観心十界曼荼羅」と比丘尼の勧進

*鈴鹿高等学校教諭・本学非常勤講師、日本史(History of Japan)

— はじめに —

「熊野へまいるには紀路と伊勢路どれ近しどれ遠し広大慈悲の道なれば紀路も伊勢路も遠からず」 (梁塵秘抄)

熊野の地は古くから聖地として人々の憧れの土地でもあった。中世に入り宇多上皇の延喜7年(907)から亀山院までの約400年間にわたる熊野「御幸」の盛行に続き地方武士や庶民階層の参詣に大きく寄与した熊野比丘尼といわれる宗教女性の一群の存在があった。熊野比丘尼たちは伊勢や熊野に参籠,勤行の拠点を持ちながら全国各地を巡回し,熊野信仰の流布や託宣を行った。表題「熊野観心十界曼荼羅」は比丘尼たちが各地を勧進した時に携行した絵図である。熊野権現信仰の功徳や有難さに加えて教化宣伝用に地獄、極楽の絵相のこの絵図を用い,それを展げて「絵解き」という解説をしたり,時には歌や踊りもとり入れながら廻向巡行の旅に出たのであった。本稿は熊野三山信仰の本質とその推移及び「熊野観心十界曼荼羅」の源流について考察したものである。

1.「クマノ」の語源とその信仰

本州最南端に位置する熊野の地名,語義については本居宣長「古事記伝巻十」をはじめ明治以後でも折口信夫(民俗学)などの諸説があり一定はしていないが,その中で鎌田純一(元宮内庁掌典)の所説を継承されている本宮の九鬼家隆宮司の解説が今日広く知られている。本宮大社出版の小冊子「熊野信仰について」によれば「クマノ」の「クマ」を「奥まった処」「隠された処」,すなわち「神の住み給う処」ととり「クマ」と「カミ」には同じ意味があるとされている。その処(場所)は上座でもあり聖なる処として位置づけられ古代から大和や出雲と共に人々の憧れの土地として崇め尊ばれた処として解釈されている。黒潮の流れと熊野川の清流,さらには深々と重なりあう峰々の聖なるこの地方は古くから天与の恩恵を綿々と芳香させ神の国,常世の国として「滅罪と甦り」を求め,神を感じた多くの人々が畏れ崇めてきた山紫水明の霊域でもあった。

国道42号沿いの樹木の茂った現熊野市有馬町には「花の窟」(世界遺産)がある。花窟神社由緒書によれば「一書(あるふみにいわく)日伊弉冉尊火神を生み給う時に灼(や)かれて神退去(さり)ましぬ 故(か)れ紀伊国熊野の有馬村に葬(かく)しまつる土俗(くにびと)此神の魂(みたま)を祭るには花の時(りに)花を以って祭る 又鼓吹幡旗(つつみふえはた)を用いて歌い舞して祭る」「花の窟」の名は増基法師が花を以って祭る・・・と記されている。(日本書紀) 社殿はなく高さ45m程の巨岩壁そのものが御神体であり神や霊魂の住み給う処,隠国(こもくり)の聖地とされたのであろう。巨岩壁の正面にはこじんまりとした神壇が設けられ玉垣がめぐらされている。拝所後背は熊野灘(七里御浜)

が迫り自然景観からも海神信仰とも融合された霊場地として形成されてきたことが推察される。なお後述するが熊野古道伊勢路はここより本宮へ向う本宮道と海岸線から新宮を目指す浜街道に分かれている。

日本には古くから山や海をはじめ太陽や月さらに雨風にいたる自然万物や自然現象には神霊が宿ると信じられ，これら自然神を祀る祭祀遺跡（磐座（いわくら））や社（やしろ）が各地に残っている。深い森林に覆われた紀伊山地も神代の時代から神仏の宿る霊山として自然崇拝、山岳信仰が行われていた。古代中国伝来の道教や儒教に加えて6世紀中期には朝鮮（百済）から仏教が伝播し，これら外来の思想と古代日本の在来信仰が結びついて山伏修行や修験道など我が国固有の信仰形態として発展してきた。

平成16年7月「紀伊山地の霊場と参詣道」が国内では12番目の世界遺産として登録された。三重，奈良，和歌山の3県にまたがる紀伊山地の大自然に根づき育まれてきた「熊野三山」「吉野大峯」「高野山」の各霊場とそれにつながる参詣路(古道)はそれぞれ起源や内容を異にはしているが，いずれの霊場も悠久の時を越え霊験修行の祈りの舞台として今日まで多くの人々の精神文化を支えながら我が国の宗教，文化の交流や発展を重ねてきている。また寺社や参詣路だけではなく霊場をとりまく貴重な自然景観と文化遺産が将来にわたってかけがえのない価値ある資産として高く評価されたものである。

2. 院政期における末法史観

平安の世になると仏教はこれまでの鎮護国家を目的とした奈良仏教から離れ神仏習合の風潮の深まりと共に熊野の地は権現信仰の霊場として中央にも知られるようになってくる。そして熊野は朝廷からも特別の信仰の聖地として漸次不動の地位を確立してくるのであった。殊に院政期から鎌倉初期にわたる約400年間にかけては上皇や貴族の御幸が頻繁に行われ（後述），続いて諸国からも多くの求道参詣者が熊野三山（熊野速玉大社　熊野本宮大社　熊野那智大社）へと向いその様相は「蟻の熊野詣」という諺が生まれるほど頂点に達してくるのであった。皇族たちの都での御霊会信仰に加えて何故，遠く離れた熊野の地がこれほどまでに皇族や貴族たちを駆りたたせていったのか。ここではその要因と背景を中世という時代から検証をする必要がある。すでに10世紀中頃には承平天慶の乱をはじめ地方豪族や有力農民による紛争が各地で発生しており，その帰結として地方政治の乱れと変貌は都の動揺を一段と深め，いよいよ混迷と不安の世相となってきている。一方この様は不安な社会状況にあって当時「往生要集」（985）の要道を説いた源信(恵心僧都)の登場があった。彼の著した「往生要集」は都の皇貴族から庶民階層の老若男女に対して濁世末代の世から念仏による極楽往生の教行を説きその教義は広く各地に流布されていくことになった。その後源信の教義は遠く中国（宋）にまでおよび，時の支配者であった真宗皇帝

から「往生要集」は絶賛をうけ源信をして“日本比叡山源信如来”として礼拝されていたことも伝聞している。

武家政権が成立してくる鎌倉期にはこれまでの一部の貴族や知識人にしか理解されなかった難解な戒律や経典，さらには秘密の呪法(密教)を重視した南都仏教や天台，真言の諸宗から直接，地方武士や庶民の救済をめざした庶民仏教へと大きく転換してくる時代でもあった。この様に新しい救いの道を説く新仏教の出現はのちの浄土宗の開祖である法然（源空）やその弟子である親鸞，さらには日蓮，一遍に代表される。これら開祖の教えはそれぞれ教義上の相違はあるが「往生要集」の教法が大きく影響し，朝廷や幕府をはじめとする迫害にも屈せず専修念仏の功徳と人々の救済をめざし鎌倉仏教の中枢として定着し全国に広まっていくことは自然でもあった。

しかしながらその後も地方では上総の平忠常の乱や前九年合戦がうち続き土着武士たちの台頭によって混乱は深刻化し 11 世紀はまさに社会の大きな転換期を迎えていくことになる。

延暦 13 年（794)，都が京に遷都されて以来これら地方の混乱と未曾有の世相不安は，国家安穏や現世利益，さらには来世での仏との結縁を求めようとする為政者たちの動揺や勢力衰退の危機感を増幅させることになった。そこで都より南方に位置し古くから他界とむすびつけられて考えられていた聖地熊野（那智山）の観音（補陀落）信仰や弥陀慈悲への祈願と功徳救済の「御幸」につながっていったことが窺える。また混沌とした社会不安の中で源信に先だち，諸国を遊行しながら専修念仏による西方極楽浄土への往生を説き浄土教を広めていった空也上人の勧進や中世末期に台頭してきた「末法思想」の仏教史観があげられる。平安末期成立の「扶桑略記」から当時の皇室の動揺の一端がみられる。

後冷泉の永承 7 年正月（1052)「千僧を大極殿に屈請し観音経を転読せしむ・・・今年始めて末法に入る」　永承 7 年の末法元年には仏法は完全に滅びて天災地変や戦乱が頻発する世になると考えられた。同時にこれまでの政治的秩序の乱れや地方の混乱，さらには現実に悪化していく様々な社会現象もすべて末法思想を背景としてとらえられ末法到来の前兆に符合させる風潮が広まっていったのである。末法思想と浄土教の広がりは中央の皇族から地方武士や庶民にいたるまで当時の世相の中で対照的構図を重ねながら不安な現世からの逃避と来世での救済を求めて自然発露的に熊野信仰への発展と深まりをもっていくことになっていった。この間，末法翌年(1053)には平等院鳳凰堂が落成し，その後東国では奥州平泉の中尊寺金色堂，陸奥には白水阿弥陀堂さらには九州豊後でも富貴寺大堂など地方の有力武士たちによって次々と阿弥陀堂が建立されている。また，同じ頃には阿弥陀仏が往生を願う人々を浄土に導いていく有様を描いた来迎図（聖衆）も盛んに作られている。これら多くの阿弥陀堂建築や美術作品の遺構は平安後期から鎌倉期の社会背景と密接に関係し具現化されたものである。

3. 三山三世信仰の発生とその本質

熊野三山は日本固有の自然や神の信仰に由来しながら奈良末期の神仏習合の影響を色濃く受け“権現信仰”という信仰形態が生まれるに至った。速玉大社，本宮大社，那智大社は本来別々の発祥と信仰があったが熊野修験道の成立とあいまって平安後期までには三所権現信仰の対象とした三山巡りの呼称と盛行は定着してくる。次に三山について，その発生（由来）と現況について略記しておく。

(1) 速玉大社

熊野川を背にして朱色に映え輝く熊野速玉大社の境内に入ると，ひときわ大きな二本の老木が目にはいってくる。「梛の大樹」と「オガタマノキ」である。共に天然記念物の御神木であり社殿に供えると神の霊を招くといわれている。梛の大樹は社伝によれば平重盛公の御手植とされ幹周 6m，高さ 20mにも及ぶ樹齢千年の老木である。(余談ではあるが自坊内にも幹周約１mの同木がある，由緒等は不明)　梛は（ナギ，凪）に通じ古くから権現信仰の象徴とされ家内安全や縁結びの信仰に根ざしている。難苦行であった熊野参詣者たちの心の支えや参詣のしるしとして小枝やその葉をいただいて帰る習しがあった。
後鳥羽上皇の熊野御幸に随行した藤原定家の和歌である。「御幸記」

「早振る熊野の宮のなぎの葉を変らぬ千代のためしにぞ折る」　（定家）

速玉大社は神倉山の霊石コトビキ岩（天ノ磐盾（いわだて））を御神体とする自然崇拝や原始信仰に源を発しているが景行天皇 58 年（128）の御代に初めて神殿を建て今日の神社神道へと信仰の形を整えてきた。(本宮) すなわち熊野三神とされる　速玉大神，夫須美大神，家津美御子（けつみこ）大神がコトビキ岩に降臨されたことにその由来と創始がある。その後三神はそれぞれ薬師如来，千手観音，阿弥陀如来（権現）として現世の衆生の苦しみや，過去世の業（カルマ）の救済，さらには神仏の御加護によって浄土への導きをいただく聖地として祀られ信奉されている。

(2) 本宮大社

「神社縁起」「帝王編年記」等によれば崇神天皇 65 年に社殿が創建されているということが文献の初見とされているが上古の正確な創祀年代は不明である。最近の造営については光格天皇享和 2 年（1802）に本殿，第一殿，第二殿が造営され続いて同文化 7 年（1810）には第四殿が造営将軍徳川家斉らによって国家的大事業として造営されてきた。熊野縁起

には「大日本六十余州衆生我許参詣者除二貧窮一与二富貴一現世安穏後生生二善所一之証誠阿弥陀如来熊野大権現也」と神言にあり富貴神(ふうきのかみ)寿命神として古くから篤い信仰がみられた。祭神は熊野坐(にます)神で素盞嗚尊(すさのおのみこと)（命）とされるが本地垂迹説が広まるに従い12世紀の初期には「家津御子神(けつみこかみ)」あるいは「証誠菩薩」と呼ばれ本地は阿弥陀如来とする信仰が成立した。旧社地は岩田川と音無川に挟まれた熊野川中州の大斎原(おおゆのはら)に鎮座されていたが明治 22 年の大水害によって倒壊,流失の大被害を受け同24年従来の地を別社地と称して石祠二殿を造営し現在地に遷座し合祀されている。宝物殿には大水害以前の本社，末社の全景が描かれている「熊野本宮并諸末社図絵」(江戸後期)が保存されており往古の様子を偲ばせている。現在の本宮大社は一の鳥居から158段の石段をあがりさらに大注連縄のかかる神門をくぐると，そこには檜皮葺の四つの社殿が横一列に並んでいる。主神である「家津御子神」が祀られているのは第三殿（本殿）である。本宮にまつわる興味ある説話がある。のちの時宗の開祖である一遍上人が念仏による衆生救済の廻国巡礼に出かけたある時,“信心”についての疑問にぶつかった。文永11年（1274）夏，本宮大前（証誠殿）に参籠し一心に祈る中で神宣（熊野権現）を受けられ他力念仏の深奥をより一層感得されるのであった。その後，一遍上人は「六字名号一遍法」の境地を開かれ「南無阿弥陀仏，決定往生六十万人」と刷られた算（ふだ）と踊念仏によって諸国を勧進される開教の契機を得られたと伝えられる。この因縁から今日でも本宮では一遍上人顕徳祭の月例行事が行われており，また時宗の総本山（藤沢市，清浄光寺）では当宮を護法の神として今日でも尊崇されている。

(3) 那智大社

本宮が別称「山の熊野」の山岳神に原像をもち苦修練行の山岳霊場に根ざしているのに対して速玉(新宮(にいみや))と那智は海洋他界の常世信仰が仏教化して発生してきた。すなわち新宮は現世利益の薬師如来が本地の中心仏であり那智は観音信仰の聖地として発展してきている。これら三社の創祀についてはそれぞれ異なるが 11 世紀末期までにはお互いに祭神を勧請しあいながら三山検校や熊野別当の支配をうけて山岳修験と海洋宗教を兼ねた霊験信仰の聖地としてのち熊野三山と総称されるに至るのである。那智大社は社伝によると神武天皇の東征の折，那智の滝に大己貴(おおおなし)神（第一殿滝宮）を祀られ八咫烏(やたがらす)の案内で山を越え大和に入られてから，その後考昭天皇の御世に那智滝に千手観音が出現され山上に十二所権現が祀られたとされる。

仁徳天皇 5 年（317）にはいり那智の大滝より社殿を現在地に遷し主神である夫須美大神を祀ったのが「熊野那智大社」の起こりとされる。(第四殿　西御前)　時代は下り後述の上皇たちによる「御幸」の盛行と先達，熊野比丘尼たちの熱心な勧進活動によって熊野信仰はますます広がりその影響下で全国各地に熊野分社（約 3 千）が建立され熊野は三社並立の形態を保ちつつその中心霊場として我国の国史，神祇史上端倪(たんげい)の歴史を今日に伝え

ている。なお，現在の社殿は，天正年間，豊臣秀吉により再興され，享保・嘉永の大改修を経て，昭和10年頃の修復によって出来たものである。大社創建1650年祭奉賛の記念行事として昭和47年に開館された宝物殿には権現信仰の様子を描いた「熊野那智山宮曼荼羅」(室町期）や熊野権現の本地仏の画像で神名と仏名とを短冊にして併記し神仏習合の礼拝対照とした「那智熊野権現本地曼荼羅」(室町期、絹本の極彩色）をはじめ日本三大経塚のひとつといわれる那智経塚出土の「御正体」「本地仏」「経筒」や熊野詩懐紙（後鳥羽上皇御宸筆）などが展示されている。

4. 熊野御幸と九十九王子

院政期から鎌倉初期の約400年間かけて上皇，法皇，女院，貴族の熊野御幸は盛隆を極めた。後白河上皇の33度を筆頭にして上皇，法皇の9帝だけでも約100度に及ぶ「御幸」がある。また女院，法親王，姫宮をあわせるとその数は140度に達している。下表は「和歌山県聖蹟」による一覧である。　　（表―1）

宇多上皇	1	延喜7年（907）	上皇として最初
花山法皇	1	正暦2年（991）	※
白河上皇	12	寛治4年（1090）～大治3年（1128）	
鳥羽上皇	23	天治2年（1125）～仁平3年（1153）	
崇徳上皇	1	康治2年（1143）	
御白河上皇	33	永暦元年(1160)～建久2年（1191）	※
後鳥羽上皇	29	正治元年（1199）～承久3年（1221）	※
後嵯峨上皇	2	建長2年（1250）～同7年	
亀山上皇	1	弘安4年（1281）	

花山天皇はとりわけ信仰心が強く在位1年10カ月あまりで出家され正暦年間（990～995）に那智山二ノ滝に庵を結び千日籠りの仏道修行に入られている。また院中在位年数と「御幸」度数からみれば後鳥羽上皇は約10カ月に1度の「御幸」，次いで後白河上皇でも1年毎という頻度であった。

「御幸」ルートについては紀伊半島西岸を行く紀伊路が中心であり平安京から淀川を船で下り，摂津国の渡辺津付近で上陸し和泉国をへてさらに雄（お）ノ山峠をこえて紀伊国へと入る。そして紀ノ川を渡り南下して現田辺市付近より太平洋岸を通る大辺路（おおへじ）と険しい山中に入る中辺路（なかへじ）とに分岐しそれぞれ熊野に至っていた。「御幸」は本宮大社までの最短にあたる中辺路の古道を利用して聖域熊野へと向ったのであった。最も険しい中辺路の「御幸」ル

ートには三山の末社である熊野王子が所々に分祀されていた。

さらに「御幸」にあたっては陰陽師を通じて日時を決め御精進屋に数日籠り身を清め，さらには仏堂での経典供養の儀式をすませて出発している。随行においても十数人の規模から多きは白河上皇の元永元年（1118）9 月の御幸のように八百人を越えることもあり先達僧を前列に御導師～公卿～北面武士～進物所係～主典代～庁官と続き約 1 カ月にわたる難苦行の旅であった。（中右記）

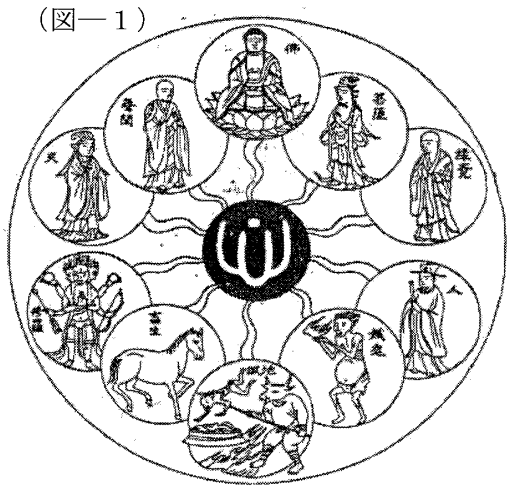
○　九十九王子

重畳と続く紀伊山地の山々の果て前面には大海原が拡がる熊野の地は京洛より山川八十余里といわれた。その熊野参詣の沿道には約 2 キロごとに王子と称される三山の神々を勧請して祀られた末社（遥拝所，休息所）が設けられた。王子の起源については地名に由来し某王子と呼称されその数も熊野参詣の盛行につれて各地に増加してきた。摂津国 4 社，和泉国 18 社，紀伊国 72 社の実際は 94 社であるが通称九十九王子といわれている。その中で特に格式の高い王子を五体王子とし現田辺市の滝王子，発心門王子をはじめ藤代王子，印目王子，稲羽根王子がこれにあたる。いずれにしても多くの参詣者にとって道標の役目もはたす安息所であった。ただ上皇や法皇の専制力に裏うちされていた院政期もやがて武家政権との対立から次第に勢力が衰退し，とりわけ承久の乱以後の鎌倉中期に入ると王子の荒廃も色濃くなっていった。

5.「熊野観心十界曼荼羅」の源流

北宋の慈雲遵式（964～1032）の仏弟子欽若が遵式作の図と解説文に自らの序文を付して刊行した「円頓観心十法界図」（1023 年頃）に典拠している。（天竺別集）「円頓観心十法界図」は「心」という一字を中心として，その周囲に仏界，菩薩界，縁覚界，声聞界，天界，人界，修羅界，畜生界，餓鬼界，地獄界の悟りと迷いの十界を描いた絵図である。（図柄は多様）絵相については中国天台宗の開祖智顗の「摩訶止観」に説かれている「一念三千」の教義が源流とされる。以下は「摩訶止観」巻五上の「一念三千」に関する部分の引用である。

（図―１）



（集別竺天）圓界法十心觀頓圓

夫一心具二十法界一。一法界又具二十法界百法界一。一界具二三十種世間一。

百法界即具二三千種世間一。此三千在二一念心一。若無レ心而已。介爾有レ心即具二三千一。

十界は一心より生じ,凡夫の一瞬の思いの中に宇宙の全ての事象が具わっているとされる。難解な仏教教義であるが色井秀譲著「天台真盛宗読本」に依ると十界にはそれぞれさらに十界がふくまれ百界となり，この百界に「十如是」が内包され百界千如となり，百界千如の世界は衆生世間，国土世間，五蘊(うん)世間との三世間をもって構成されているから，ここに三千世間という数が出現し，この三千でもって一切の諸法をとりまとめることができる。

さて「円頓観心十法界図」「観心十界曼荼羅」についての研究は腮尾尚子，下村巳六氏等の論文に詳しいが前述の天竺別集について，下村巳六著「熊野の伝承と謎」では以下の様に指摘解説されている。「心」字を中心に十個の円が描かれ，その十界の一つずつを表象する字と略図が円中に描かれ，最上段の円は「仏」，最下段の円は「地獄」であり、中心の「心」が拡散すれば「十界」，集約すれば「心」となる意を示している。仏教大辞典に依ると「円頓」とは時を経ずして速やかに成仏すること・・・。円頓観心の「観心」とは心は万法の王，一事として心に漏るるものなければ心を観察するは即ち一切観るなり。依て凡そ事を究め理を観するを観心と云。　所で中国版（製）の「円頓観心十法界図」がいつ頃日本に伝来したのか，その時期と経緯についてはいまだ多くのことが不明であり，また国内での作図時期についても確証されるに至っていない。ただ最も古い作例としては東京芸術大学芸術資料館所蔵の「十界曼荼羅」(院政期，紙本墨画淡彩　34.3×28.2 cm伝玄証本)が腮尾氏によって報告されている。いずれにしても「円頓観心十法界図」を図相のベースにして六道絵，地獄図あるいは来迎図や「老の坂図」など様々な要素を配してモディファイ(修正)したものが南北朝時代頃(諸説あり)に作られ，この絵図を先達や比丘尼たちが各地を勧進する時に展げ絵解きをしながら持ち歩いたのが「観心十界曼荼羅」や「熊野曼荼羅」であると考えられる。構図の多くは供養壇と三尊仏の間には「心」字が入り上方左右には日月，虹のような円弧の中には右手から赤ん坊，中央には壮年，左端が老年を描き人の生涯の姿を登場させ，円弧の左端には閻摩庁がその下方には地獄の様相がほぼ共通して描かれている。時代は下って江戸期に版行され大衆の間に広く流布された墨一色の「一枚刷」には施餓鬼供養次第の「若人欲了知，三世一切仏，應観法界性，一切唯心造」華厳経の四句偈が配されていることも多い。

中世以降，熊野信仰を広めて勧進に活躍した比丘尼や先達たちは「観心十界曼荼羅」の地獄極楽図の絵解きによって熊野権現の霊験と善根功徳の唱導に大きな役割を果した。加えてまた，それを支え多くの参詣者たちを集めた背景には「本願」と呼ばれた組織と「師檀」という関係の存在があった。

熊野三山には古くから「本願」といわれる仏道修行の一環として堂塔，仏像などをつくっ

たり法会を主催したりする組織ができていた。例えば本宮には本宮庵主，新宮には梅本庵主，那智には御前庵主，滝庵主，那智阿弥，大禅院，理性院，補陀洛山寺，阿弥陀寺がこれにあたりこれらを合わせて「九本願」と呼んでおり，これらの本願は，さらに各地に出張所を設け，熊野信仰の仲介と宣伝を兼ねた「本願」の一拠点でもあった。
次に熊野信仰の特色の一つと考えられる「師檀」関係についてみると，熊野には信者（参詣者）である檀那に対して旅の宿泊や祈願等の世話をする熊野御師と地方から檀那たちを案内してくる役目の熊野先達が連結し聖地熊野への先導がスムーズに運営される制度が整っていた。この関係は当初は貴族との間に根ざしていたが，鎌倉期以降になると地方武士や庶民階層にまでひろがり，熊野比丘尼の勧進・宣伝活動と共にその結合範囲は広域に及んでいった。

さて，県内における「熊野観心十界曼荼羅」の調査，研究については平松令三氏（元県文化財保護審議会々長）をはじめ萩原龍夫（元明大教授），小栗栖健治（兵庫県立歴史博物館）などによる発表や研究論文がある。萩原氏は昭和32年三重県志摩町（市）で一幅の“奇妙な地獄絵”を発見され，その後豊富な実証資料や研究にもとづいて「観心十界曼荼羅」や「那智参詣曼荼羅」のルーツについて発表されている。萩原氏著書の「巫女（ふじょ）と仏教史」―熊野比丘尼の使命と展開― に詳しく，「熊野観心十界曼荼羅」および「熊野比丘尼」の命名も萩原氏によってなされている。また本年11月に県立美術館で「熊野観心十界曼荼羅展」の開催にあたって講演「浮かびあがる熊野比丘尼の実像」された小栗栖健治氏の研究論文「社寺参詣曼荼羅」論の一視点，によれば社寺数41件，作例数133点に及ぶ「社寺参詣曼荼羅」の中でもとりわけ「熊野観心十界曼荼羅」と「那智参詣曼荼羅」の詳細な分類と類似点に言及されている。現時点において「熊野観心十界曼荼羅」は三重県では13点が確認されているが全国的な発見例が約50点であるから，その数は最多地域であり，今後もその数は増える傾向にある。（後述）以下，小栗栖氏の論考の指摘である。「那智参詣曼荼羅」の発見数については「寺社参詣曼荼羅」の中では「立山曼荼羅」が41点という発見・確認に次いで「那智参詣曼荼羅」は31点となっており，この二者で全体の50パーセントを越えている。分布状況からみると上記二点以外の「社寺参詣曼荼羅」の多くは寺社縁起としての性格や地元の年中行事の宣伝活用も加味させながら霊験・功徳の称揚を目的とした宗教絵図として製作されたものと推察されている。さらに「熊野観心十界曼荼羅」と「那智参詣曼荼羅」とは図像や色調などの比較調査での類似点や一具として伝来しているという事例がこれまでに8点ほど報告されている事実などを総合的に論究され，両者の製作時期，工房，絵師が同じであった可能性も示唆されている。製作年代については「社寺参詣曼荼羅」については16世紀から17世紀にかけて大量に製作されており，その中で「熊野観心十界曼荼羅」と「那智参詣曼荼羅」はほぼ同時期の江戸中期以降に作例されたものが多い。

県内のこれまでの確認された作例もほぼこの時代と一致している。なお、県内の最初の発見は昭和 58 年、平松氏を中心とした当時の県文化財保護委員会のメンバーによる津市の大円寺(廃寺)にはじまるが，この時には「那智参詣曼荼羅」「観心十界曼荼羅」のセットに「釈迦涅槃図」の三幅が確認されている。「観心十界曼荼羅」については立会ったメンバーにはただこれまでに見たことのない“奇妙な地獄絵”程度の認識であったようだ。それよりほどなく平松氏は以前より親交のあった萩原氏から一冊の著書が届いた。前述の「巫女と仏教史」である。萩原氏の著書の中ではじめて「観心十界曼荼羅」の口絵や解説に触れ大円寺での発見された“奇妙な地獄絵”がほぼ同質の絵図であることを知るのであった。

その後萩原氏の著書や論文発表は当時の学界に大きな反響をあたえ明治大学の国文学研究者（林雅彦ら）を中心として結成された「絵解き研究会」やこの分野の研究者の間に多くの課題をなげかけたのである。ただ，いずれにしても製作年が記された「寺社参詣曼荼羅」や「観心十界曼荼羅」は今日一例も発見されておらず，また現時点では中世の作例も確認されていないという現状は今後に残された研究課題のひとつでもある。

平成 19 年 11 月，県立美術館において，これまで県内で発見された「熊野観心十界曼荼羅」を中心に「那智参詣曼荼羅」「浄土双六」数点を加えて展示会が開催された。展示会の主旨はこれら曼荼羅の世界を専門家の研究領域からさらに広げ多くの人々に直接触れていただきながら往古より熊野の地に神仏を観じ，我が国独自の精神文化やかけがえのない多くの文化遺産をつくりあげてきた先人の足跡を偲んでいただくことであった。5 日間にわたる展覧会は県内外から予想を越える高い関心と反響をよび連日，多くの参加者を迎えることができた。とりわけ講演会には前述の小栗栖健治氏と元興寺文化財研究所の高橋平明氏「演題：熊野観心十界曼荼羅の不思議」を講師にお招きした。両氏は専門分野の内容を，平易にわかりやすく説明されており今後の研究課題や三重県の曼荼羅の現況分析の報告や熊野比丘尼の実像について多くの示唆をあたえていただいた。講演や鑑賞には沢山の質問がとびかい大変有意義な展覧会であった。この機会をとらえ，これら貴重な文化遺産の伝承を後世に繋げていくことが肝要なことでもある。

—主な出展作品—　　（表—２）

※	熊野観心十界曼荼羅
	盛福寺本　勝久寺本　貞観寺本　西念寺本 蓮蔵寺本　平楽寺本　正法寺本
※	那智参詣曼荼羅
	貞観寺本　西光寺本
※	浄土双六
	個人所蔵本

次に出展作品の中で「熊野観心十界曼荼羅」を中心としてこれまでの調査結果を参にしながら，構図上及び発見状況の共通点や特徴を概略してみると，

1)　製作時期については 17 世紀後半～18 世紀初（定型本）。
平楽寺（明和 3 年銘），正法寺（文政 11 年銘），他県の絵図についてもほとんどこの時期が中心となっている（銘文等）

2)　寸法（cm）は，およそたて 140×130 が標準である。

3)　紙画の特徴として
「人生の坂道」と「地獄絵」（石女（うまずめ）地獄，両婦（ふため）地獄）が構図上スペースも広く重要ポイントである。「人生の坂道」の登場人物は普通 24 名程が基本であるが例外的に勝久寺本ではその倍の人物が描かれていたり「心」字の前には閻魔大王たち冥官が配置され，中央祭檀が地獄の間となっているなど例外的な構図もある。半円形の「老いの坂道」には共通して老婆が描かれ，そこには男の姿は登場していない図相は興味がある。

4)　紙折目の痕跡が認められる。
比丘尼たちが諸国勧進のために絵図をたたんで小箱に収めた時の折目である。

5)　天台真盛宗の寺院からの発見が多い（後述）
分布状況は現在の津市が多く，またその多くは県（津市）有形民族文化財の指定を受けている。

（図—２）

蓮蔵寺本　（たて 143.2 cm×124.4）

○熊野比丘尼

平安後期の院政期における「御幸」の盛行期からしばらくは武家が実権を把握してくる戦国動乱期にかけては新仏教（鎌倉仏教）の影響もうけ熊野参詣は一時衰退期に入る。その後，伊勢参詣の風潮の広まりや伊勢神宮と熊野三山との関係が説かれると（伊勢比丘尼），伊勢路も開かれ三山巡りの信仰はここに再び盛況を呈してくる。ことに中世以降の室町末期頃より全国各地から熊野三山への勧進と誘致に活躍していたのが熊野比丘尼という女性宗教者たちであった。半僧形の比丘尼たちは歌念仏や熊野牛王（護符）を配布しながら「勧心十界曼荼羅」「那智参詣曼荼羅」を携行し「絵解き」をして熊野信仰の善根功徳と寺社や尊像の建立また修復のための金品の喜拾を勧めて渡り歩く一種の芸能宗教者でもあった。そのために熊野には比丘尼たちを統率，管理する神倉妙心寺，本宮西光寺が設けられており，那智には補陀洛山寺などの本寺組織が置かれていた。さらに地方における比丘尼たちの拠点も「本願」の地方出張所として各所に設けられていた。「本願」の地方拠点としては熊野家（現志摩市）や武久家（現岡山県瀬戸内市邑久（おく）町）はその代表例もである。

6. 結び

県内での「熊野観心十界曼荼羅」の発見とこれまでの調査分類の結果においては前述のように天台真盛宗の寺院が非常に多い。さらにその分布状況においては伊勢神宮と熊野三山の地理的接点にあたる津市内からの発見例が目立ってもいる。その背景や要因については，これまで平松氏らによっても研究報告や仮説がなされているが「熊野観心十界曼荼羅」「熊野比丘尼」の研究にとって今後の興味と関心の大きい研究課題のひとつといえる。私は本年 11 月に開催された県内最大規模の「熊野観心十曼荼羅」展を機に以下 2 点をとりあげてまとめとする。

そのひとつとして古代から近世に至る平城，平安を中心とした両都と伊勢国（三重県）との地理的（地誌）位置関係からの視点である。熊野の地は我が国おいて早くから神仏習合の源流の一拠点として宗教文化や外来思想が早くから醸成され旧都との宗教的慣習や伝統文化をはじめとして文物の交流が頻発な土地柄でもあった。皇室祖神を祀る伊勢神宮（伊勢比丘尼）と熊野との関連については本稿では言及をさけるが，「熊野比丘尼」による勧進や行動拠点という領域にしぼり込んで「斎宮」の存在が少し気になったので斎宮歴史博物館（学芸員）のきき取りと資料による確認をした。伊勢神宮は本来，皇室しか奉幣が許されなかったという古くからの信仰儀式に根づいており，その点あらゆる人を受けいれた隠国の三山信仰とは本源的に信仰形態が異なっている。結論的にはただちに「斎宮」と三山信仰とが連結する直接的な関係は見当たらなかったが，いわゆる「群行」が盛況となってくる 9 世紀後半（平安初期）の藤原摂関時代から院政の始まる約 70 年の間には伊勢神宮と熊野を

結ぶ伊勢路(熊野古道)が漸次整いはじめ，ここに伊勢詣りと西国巡礼のルートの原型が成立してくる。

ただ伊勢路がその後，盛況してくるのは「熊野比丘尼」の布教活動や「熊野観心十界曼荼羅」の製作時期にあたる17世紀以降である。

「斎宮」と「熊野比丘尼」との直接的な関連は少なくとも近世以前には現在の時点においては見当たらないが今後は「伊勢比丘尼」の周縁から視点を「熊野比丘尼」との関連性へと結びつけて「熊野観心十界曼荼羅」の世界を観ていくことも興味深いものがある。斎宮歴史博物館のガイドシート「斎宮今昔」に記されている一文である。“日本の神に仕える斎王がいた斎宮では，仏教はタブーでした。それは言葉遣いにも現れ，例えば僧侶を髪長（かみなが）と言ったり，お経を染紙（そめがみ）というように，仏教的な言葉(忌詞(いみことば))を言い換えて使っている・・・。”

もうひとつの要因は密教との関係においての論究である。密教の最も特徴的な教えが曼荼羅であるという視点から考証すれば例えば「熊野本宮八葉曼荼羅」(14世紀　室町期)は「大日経」によって説かれた仏の悟りの世界を胎蔵界曼荼羅で図示されたものであり，「熊野曼荼羅」の主流はおしなべて胎蔵界の系統となっている。「円頓観心十法界図」が前述のように天台の「摩訶止観」の教義にもとずいて描かれた絵図であり，これをさらにモディファイした曼荼羅が「熊野観心十界曼荼羅」であった。熊野権現の霊験信仰の勧進にはこの絵図を熊野比丘尼たちが絵解きして諸国を巡回するのであった。最新の絵解き研究会の報告では絵図の絵解きについては江戸期に入ると天台仏教を母胎として生まれ専修念仏，専唱題目の「信」の中に戒が含まれていると考えた(四不壊浄，七仏通誡偈)浄土宗や日蓮宗，また町人の道徳を説いた「心学」の中まで転用されてきているという発表もある。(腮尾氏)

県内寺院の宗派の中では圧倒的に真宗高田派が多い中で「熊野観心十界曼荼羅」の発見は未だ報告されていない。そこで西教寺（大津市）を総本山とする天台真盛宗の宗義について確認すると「宗憲」には次のように明記されている。要約すると「戒称二門に円密を相承の法門」とする・・・。

また所依経論，疏釈，典籍については法華三部経，梵網経及び浄土三部経を正所依の経とし十住毘婆沙論及び往生論を正所の論とする」とある。「熊野観心十界曼荼羅」の源流が「円頓観心十界図」をモディファイされてきたというこれまでの一連の通説に従って考証する時，天台宗門（山門・寺門派）の根本教義や信仰の実践的形態あるいはその教化についても自然に同様の構想や一致点が見い出される要素が内包されてはいないのか。

天台宗の教義は「法華経」をよりどころにしながら密教と禅，そして円戒の法義，実践の中で善悪男女，賢愚聖凡の区別なく人々を浄土得生の今世今後に導き徳義を涵養することを目的としている。換言すれば天台諸宗の根本教義は仏の究極の教えを「法華経」にすえる宗門である。

前述でも少し触れたが「曼荼羅」と密教の関係については今後さらに研究を深化させていかなければならない課題のひとつでもある。天台三大部のひとつである摩訶止観（一念三千，十界の仏教観）の教義は密教（台密），とりわけ胎蔵界曼荼羅との関連から「円頓観心十界図」の解明，さらには「熊野観心十界曼荼羅」の源流をさぐる上においてますます重要な視点となってくる。

法勝寺流円戒を相承しながら円頓菩薩戒の血脈を相承の次第とする天台真盛宗の寺門にその発見例が多い根拠を「円頓観心十界」の図相や縁起について総合的に推察した時，天台仏法の宗義にその法脈がより近似し，その教行一流の相違点が真盛精舎と真宗高田派にあることも浮びあがってくる。ただ同時にその因果をめぐっての関係資料は不足しており，合理的な根拠や研究報告も現在，希少であるだけに未だ謎の空白領域でもある。その深淵については今後，熊野と旧都そして伊勢を結ぶ三地点の地理的位置関係（宗教文化の連結点）や津市を中心としてその発見例が最も多いという事例背景も含めて考察していくことが肝要でもある。

埋れた三重の曼荼羅のさらなる登場を期待しながらこれら疑問点の解明と課題を提起して結びとする。

参考・引用文献

1)「密教」— 生命と宇宙の交錯 —　大正大学選書
2)「熊野の伝承と謎」　下村已六　批評社
3)「天台真盛宗読本」　色井秀譲　（総本山　西教寺）
4)日本の神仏の辞典　大修館
5)熊野信仰について　本宮大社々務所
6)熊野速玉大社　御由緒
7)三重県史研究　第20号　〈小栗栖健治，石黒久美子〉
8)四日市博物館（編集，発行）　「冥界の裁き，閻魔様と地獄の世界」
—東海に残る六道信仰の造形—
9)腮尾尚子　「円頓観心十法界図」についての一考察
—図の源流をめぐって—
10)西山克　朝鮮仏画甘露幀と熊野観心十界曼荼羅図
11)清水建　熊野からみた神仏習合
12)小栗栖健治　「社寺参詣曼荼羅」論の一視点
13)萩原龍夫　「巫女と仏教史」　吉川弘文館
—熊野比丘尼の使命と展開—
14)平松令三　「三重県下発見された熊野観心十界曼荼羅図」